

平成 24 年 2 月号

今月の断酒表彰

A・Tさん 吹田支部 断酒二十七年

断酒表彰おめでとうございます。ますますのご活躍を期待いたします。

新入会員紹介

<平成 24 年 2 月 1 日入会>

I・Sさん 吹田支部

新しい仲間です。よろしくお願ひします



断酒に思う (25)

「静かなアルコール症」 (宋クリニックテキスト)

飲酒しても暴言や暴力もなく飲めば寝てしまうアルコール症者、いわゆる寝型タイプのアルコール症の人々は、自己のアルコール問題に気付きにくく、治療につながるのも遅れるので、アルコールに関連する諸問題が、酒乱タイプのアルコール症より、いつのまにか、かえって深刻になってしまっていることが多いのです。アルコール症者全体の割合から考えると、大部分がこの寝型タイプのアルコール症です。寝型タイプのアルコール症の人々を「**静かなアルコール症**」と呼び自他ともに病気に気付かないままに社会障害を進行させているのです。

街を歩いていると、いくらでもアルコール症になっている人々、その予備軍に出会うことができます。たとえば、夕方に駅の売店に行ってみてください。そこでは、様々なアルコール飲料が売られています。そして、実に多くの人々がアルコールを静かに飲んでいるのです。

彼らは、駅の売店でアルコール飲料を買って飲んでいるわけですが、いったい何を求めて飲んでいるのでしょうか。

その酒は、決して人間関係を円満にする目的で飲んでいるわけではないでしょう。

また、酒の味を楽しんでいるわけでもありません。

彼らは、アルコールそのものを求めて飲んでいるのです。

このように、アルコールそのものを求めて駅の売店で毎日のように飲んでいる人々の中に、いくらでも、アルコール症に陥っていく予備軍の人々、またアルコール症そのものの人々見ることができます。

そして、その共通の特徴は、ほとんどの人々が静かに飲んでいるということなのです。毎日駅のホームで酒を飲んでいる人々は、自分のことをアルコール症者だとは決して考えていません。なぜならば、仕事もしているわけですし、他人や社会に迷惑を掛けるような行動異常が無いわけですから、アルコール症になっているとは考えもつかないのです。



平成 24 年 2 月 1 日発行 108

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.com>

静かに飲んでいる人の中にも、アルコール症はたくさんいます。しかし、彼らは自らをアルコール症としては認めていません。

認めない理由の第一の点は、本当は身体が要求しているからこそ毎日のように飲んでいるのですが、その点に気付かないところにあります。

いつの間にか、酒に対して自由を失ってしまっている自分に気付いていないのです。

静かに飲んでいるアルコール症者が、自らをアルコール症と認めようとしない第二の理由は、彼らがまさに静かに飲んでいるという事実にあるのです。

かつて、自分のアルコール問題に気付き断酒会や AA につながって断酒を始めたアルコール症者は、ほとんどが派手な体験談を持つ酒乱型の人々でした。その結果、断酒暦の長い人々の体験談は、かなり深刻で派手な内容のものが多くあります。

せつかく断酒会や AA に出席しても、このような酒乱型の体験談を聞き、やはり自分はアルコール症ではないと考え、断酒の決意が得られにくいという事実もまた、静かなアルコール症者の問題点の一つです。

しかし、静かに飲んでいたからといって何も問題が無かったということは決してありません。むしろ酒乱型の人々よりも静かなアルコール症者の方が、人間関係の崩壊や心の崩壊が深く静かに進行して行っているケースが多いのです。

(宋クリニック テキスト 第 6 章アルコール問題社会障害抜粋)

【今月の「指針と規範」】断酒新生指針

一 酒に対して無力であり、自分ひとりの力だけではどうにもならなかったことを認める

断酒会に入会して数年断酒が継続されている人の中に、「これからはひとりでやめていきます」という人がいる。絶対やめられないと思っていた酒がやめられたときの喜びは、口では表現できないほどだ。正に奇跡だと思う。

だが、そのとき、断酒会が自分に奇跡をもたらしてくれたと考える人は道を間違わないのだが、自分は奇跡を起こすほどの力のある人間だと勘違いした人は、自分を過大評価するようになる。自分独自の発想や実践方法を絶対的なものだと考えるようになり、もう仲間といっしょでなくてもやっていけると考える。

そうした人たちが断酒会から離れて、どんな結果を出しているのだろうか。ほんの短い期間なら、その人独特の考え方でやっていけるかもしれない。しかし、ひとりほど弱いものはない。理解してくれる人も助言してくれる人も周囲がいなくなると、結局は自分の殻の中に閉じこもってしまうしかない。そして、酒を飲

んでいなくても、あのひどい酒を飲んでいたころの孤独な状態に戻ってしまう。

考えてみれば、その人にとって酒はかって、孤独を一時的に解消してくれる特効薬でもあった。人間の記憶はかなりいい加減なもので、また、時間の流れは怖ろしいものである。ひとりぼっちの断酒が苦しくなったとき、過去のつらい酒のことだけを思い出せばよいのだが、もうひとつの楽しい酒の記憶が戻ったりする。そうなると、飲酒の誘惑に勝てなくなるのは時間の問題になる。

とにかく、ひとりで断酒するといって会から離れて、よい結果を出している人はいない。われわれは、ひとりでやめられるというどんな強い自信を持ったにせよ、現実をじっくり見れば、断酒会から離れることがどんなに危険なことかよくわかるはずである。

われわれは、そうした先輩会員の脱落への過程を素直に受け止めて、自分ひとりの力だけではどうにもならないことを、改めて確認しよう。そして、これからの自分の断酒の糧にしよう。

(「指針と規範」 6~7ページ)

2月の誕生石アメジスト(アメシスト)のお話



アメジスト(アメシスト)の語源は、ギリシア語の a-methu(酔わせない)に由来します

ギリシャ神話に登場する月の女神ダイアナに仕える女官アメシストの悲劇からこの名がつけられました。

酒の神バックスが女神ダイアナに戒められ、腹いせに「最初に会った人間を虎に襲わせる」決めました。

そこへ現れたのが美しく信仰深いアメシスト。虎が彼女に襲いかかろうとするその瞬間、女神ダイアナがアメシストを守る為、透き通った水晶に変身させてしまいました。

バックスは水晶になったアメシストのあまりの美しさに呆然とし、自分のした事を悔やみ、その水晶にぶどう酒を注ぎました。すると彼女の身体は清らかな美しい紫色の宝石へと変わっていったのです。